国立国語研究所学術情報リポジトリ

厳しさの底にあるもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2067

厳しさの底にあるもの

野地　潤家

ことし（2001年）２月半ば，昭和36年（1961）３月，広島大学教育学部国語科を卒業し，各地で中学校・高校に勤めてきた人たちの同期会が景勝の地鞆の浦（広島県）で開かれ，私も招かれて参加した。参会者は１４名，卒業後４０年に近い歳月が過ぎていても，久しぶりに出会えば，大いに話が弾み，和やかな雰囲気に包まれた。私はその会合に，かつて卒業記念に贈られた，“濫觴”と命名されたアルバムを持参した。アルバムの巻末に収められた，“寄せ書き”に記された，銘々の“ことば”は，それぞれの卒業後の歩み，生き方を予言し，あるいは象徴しているようで，“ことば”の持つ不思議な力について改めて感深く考えさせられた。

同期会の２日目，鞆の浦史跡めぐりをすませ，解散を控え，昼食をとっている時，Ｏ君が話し始めた。学生時代，Ｏ君は同級生Ｉ君と共に上京し，東京駅から時枝誠記先生のお宅（世田谷区北沢）に電話を入れ，今からおうかがいしたいとお願いした。若い学生の礼を失した申し出をお咎めにならず，時枝先生には快く会っていただけた。奥様もにこやかに迎えてくださった。先生は，「このようにまとめたのですよ。」と，後に刊行された『文章研究序説』（昭和35年８月，山田書院刊）の稿本をも見せてくださった。二人が，今から国立国語研究所に飯豊毅一氏を訪ねたい旨を述べ，お宅を辞去しようとして，おみやげを持参しなかった非礼をお詫びしたら，「学生時代は，いいのですよ。」とおっしゃった。

二人はやがて国立国語研究所（当時は神田一ツ橋にあった）に着き，飯豊毅一氏（実は，私＜野地＞とは，広島高師で同級生でした。）に会ったが，既に時枝誠記先生が飯豊氏に「若い学生が二人今から行きますから」と，わざわざ電話をしてくださっていた……。

私は，学生時代，昭和18年（1943），国語学のレポートに，時枝先生の『国語学原論』（昭和16年12月，岩波書店刊）を取り上げ，そのまとめに没頭した。ところが，一度もお目にかかったことのない時枝先生が夢の中に現れ，そのお顔は輝いていた。そのことを指導教官土井忠生先生に申し上げると，そういうお顔だよと言われ，随分うれしかったのを覚えている。

Ｏ君は，飯豊毅一さんに屋台に連れて行っていただいたと言い，二人はさらに，突然小林英夫先生のお宅（新宿区百人町）にうかがった。時枝先生のソシュール言語理論批判についてお尋ねしたが，小林英夫先生はおおらかで，時枝さんの立場からは，あのような考え方もあると述べられたという。

時枝誠記・小林英夫・飯豊毅一，お三かたそれぞれにやさしく親切に二人の若者に接してくださった。当時，二人の学生を預かる立場にいた者として，深い感謝の念に満たされる。

ことし２月上旬，ナイロビで開かれた，UNEP（国連環境計画）の環境会議では，グローバリゼーションの進展によって，世界中で234の言葉が既に消え，さらに2500の言語が消滅の危機に陥っていると報告されたと新聞は報じた。思いがけぬ衝撃を受け，私はそれこそ言葉を失いそうになった。言語への対し方を改めて厳しくかつ周密に問い返さずにはいられない。